

# 中つ国年代記：ドローズナの物語

Chronicles of Middle-earth  
The story of Dr. Zbna, by Mac Ward

マット・ワード：著（WD299号より。翻訳／加筆：岡島正晃）

**強大なる敵サウロンに従う者たちは、善の勢力に見られる英雄たちと、まさに正反対の存在だ。その一人が、ハラドのドローズナである。この悪の英雄について知られる、ごくわずかな事実を、放浪の記録者が明らかにする。**

“すでにわしは別のところで、骨身を惜しまず影から我々を守ってくれている英雄たちについて語った。だがもうひとつの仕事も、負けず劣らず重要じゃ。いまこの時の歴史は、気高い英雄とその同胞だけが作ってきたわけではないからな。強大なる指輪王、サウロンに従う者たちの邪悪な行いも、また省みなくてはならん。彼らの道はわしらとは違うが、それでも同じように、したために足るのだよ。彼らの罪とその動機が忘れられれば、わしらが語り継ぐ物語は世界の真実を映さず、間違っただけの誇りと偽りの希望が、のちの人々を迷わすじゃろうからな。

今日わしが記すのは、まさにそんな男についてじゃ。その名はカリッド・ドローズナ。南方人として生まれ、サウロンに忠誠を誓って秘密の手駒となり、ハルネン川より南ではかつてないほどの権力を手にした男じゃ。もっと北に住む者にとって、ハラドはよそよそしくて謎めいた土地じゃが、それでもわしは幾ばくか、情報のつてを持っておる。聞き知った話はどれも雑多で細切れじゃが、とにかく分かったことを語ってみるとしよう……。

わしの知る限り、ドローズナの物語は彼がまだ子供だった頃、ウンバール諸侯の手で家族から引き離されたところから始まる。諸侯はこの子供の秘められた力を見抜き、ハシャリイ教団に差し出したのじゃ。わしはこの謎めいた教団の幾人かとも、長いこと話したことがあるんじゃが、そのすべてをここで述べることはすまい。ひとまずは、ハシャリイが単なる暗殺者集団ではないことだけ覚えておれば充分じゃ。実際、彼らの教団は、他国の領主が夢見ることさえ叶わぬほどの、政治的権力を握っておる。かの国において、教団に敵した者は等しく死を招き、せいぜい闇夜の短剣で死ぬか、昼日なかの処刑で死ぬかの違いしか生まぬ。

## 暗き過去

ハシャリンへの道は秘密にされ、その要塞も多くの者の目から隠されていたから、師のもとで訓練を受けていたドローズナは、ほとんど世界から忘れ去られておった。じゃがその裏で、彼は単に教えの道を生き延びただけでなく、教師たちの想像を遥かに超える才能を開花させていたのじゃ。17歳の夏を迎える頃には、彼は偉大な者と見做されていた。というのも、彼の才覚はハシャリイの悪名を高らしめた、殺しの技に留まらなかったからな。ことに彼の声は、手にした武器と同じように致命的だったと言われておる。鋭い知性と素早い機知によって、常に他者の弱みを突いて優位に立つのが、彼の得意とするところじゃった。力を求めるドローズナは、その苛烈なる魅力で周囲の者を取り込み、いずれ利用しようと目論んでおった。

そんなドローズナのやり方をよく示しておるのが、ハルクラーン卿（Lord Harkraan）を抹殺した手際じゃろう。アズカーハルの町とその周辺を支配していたハルクラーン卿とその一派は、当時ウンバール諸侯の評議会で他の諸卿と対立しておってな。もちろん卿は、自らの反抗がハシャリイの怒りを招くことなど百も承知しておったから、町には難攻不落の防備を固め、身の回りには古いしきたりに従って、大勢の近衛兵を侍らせておった。その後の顛末は、わしもしかとは知らないが、どうやら三つの出来事が立て続けに起こったものらしい。まず第一に、ドローズナがア

ズカーハルを訪れ、表向きは歓迎を受けて、謁見の間へと通された。この時ドロズナが、その蛇のような舌でハルクランに同盟を持ちかけたのか、はたまた単に身分を偽って騙しおおせたのか、それはわからん。いずれにせよ、その一週間後、長槍に突き刺されたハルクランの首が、アズカーハルの外で晒された。ウンバールに帰還したドロズナによれば、逆賊はその叛意ゆえに、自らの家臣たちの手で屠られたのだという。そして最後に、わずか数日後、南方からまた別の噂が届いた。曰く、アズカーハルが死の疫病に見舞われ、家という家の扉が閉ざされた、とな。アズカーハルの壁の内側で本当は何か起こったのか、それは察するしかないが、ウンバール諸侯とハシャリイ教団はこの報せに喜び、ドロズナを賞賛した。だが、ほとんど誰も気づかなかったが、彼の忠誠心はもはやその場にはなかったのじゃ。

ウンバール諸侯は愚かにも、ドロズナを未だに評議会のしもべと見ておるようじゃが、わしはアズカーハルの一件以来、彼の忠誠心がサウロンその人にもみ捧げられていると聞いておる。同盟相手に対する秘かな裏切りが、同盟の外にいる者には簡単に見破られるというのは、なんともおかしなものじゃな。とはいえ、ウンバール諸侯はもう長いこと、身の安全をハシャリイに任せ切りにしておったから、造反など思いもよらんものじゃろう。かく言うわし自身、ハシャリイがウンバール諸侯に逆らったことなど、ついぞ聞いた試しがないんじゃから。ドロズナの二枚舌に気づかなかったとて、無理はあるまい。もっと悪いことに、世界の四方から吹く風と、山に住まう油断なき鷲たちから報せを受け取り、ドロズナの裏切りなど一目で見破ったこのわしにさえ、あやつの描く絵図のすべては見えておらん。ナズグールの一人がドロズナをサウロンのしもべに引き込んだという者もおるが、思うにこのハシャリンは、もともと故郷の過去の栄光、ことにハシャリイ教団のそれに、魅了されていたのではあるまいか。過去の歴史を深く探るのは、時にたいそう危険じゃ。とくに、誇り高き者にとってはな。わしはドロズナが、大いなる力と昔日の栄光を約束されたものと睨んでおる。サウロンが差し出すとしたら、ほかに何があるじゃろう？ いつの世も、かの者の言葉を聞きたがる耳はあるものじゃ。それがどんなに捻じ曲げられてきたかを知ってもな。

## ドロズナの欺き

本当のところ、ドロズナの企みがかくも長く露見しなかった理由は単純じゃ。サウロンの望むところとウンバール諸侯が望むところ、どちらも似たようなものだったからじゃよ。ドロズナの過去の主人たちは等しくゴンドールを憎んでおったし、目指すところもまた同じじゃった。とはいえドロズナは、ウンバール諸侯の命令をこなしているあいだも、ハラドリムを真の主人の手下に引き入れるのを怠らなかつた。サウロンの使者がウンバール諸侯にモルドールの軍勢へ加わるよう命じ、大軍勢が召集される頃には、ハラドリムの族長とハシャリンの多くがドロズナに、そしてその背後にいるサウロンに忠誠を誓っていたのじゃ。彼がなぜ、いまだその任務にかかりきりになっておるかは、想像に難くあるまい。冥王軍の一員となったウンバール諸侯は、矢面に立たずに済む立場を喜んで受け入れ、またそれを巧みに利用して、いざという時のために戦力を出し渋っておるのよ。彼らはゴンドールを憎むのと同じぐらい激しく、恐れてもおるからな。でなければドロズナとその一派は、サウロン軍の戦太鼓に合わせて、とうに進軍を始めておるじゃろう。

そういうわけで、ドロズナはここ数年というものの、とり憑かれたように立ち働いておる。おかげでハラドの町や村は、幾つも赤い血に染まった。とはいえ、まだハラドのすべてがドロズナに下ったわけではないぞ。例えば、武勇で名にしおう若き族長、スラダーンがおる。わしの聞いたところでは、ドロズナはこの若き戦士を配下に引き込もうとしたが、きっぱり断られたそうじゃな。さりとしてスラダーンは、卑劣なハシャリンに勝るとも劣らん名声を博しておったから、もし反逆者として処刑されるようなことになれば、疑いと反発を招くこと必定じゃ。もっともそのせいで、ドロズナはスラダーンを形ばかり昇進させたあと、血なまぐさい小競り合いと略奪が続く、ハンドとの国境守備隊に送り込んでしまったんじゃが。これほど過酷な任務は、ほとんど死罪も同じよ。

ドローズナめが為した邪悪な行いは、こればかりではないぞ。極めつけは、ラターンの運命に関するものじゃ。いまや北方で仕立てられつつある大軍勢は、ハラドの食料と富を際限なく呑み込んでおり、町々はひどい重税に苦しめられておる。南方のラターンは、もともと得るも与えるも少ない貧しい町じゃったが、さらにひどいことに凶作続きでな。蓄えもごくわずかじゃった。そんなラターンの町から食料と金貨を引き出す役目を、自ら望んで引き受けたのが、ドローズナじゃ。反抗的な町へ大部隊を率いていった彼は、言うことを聞かない町の衆に腹を立て、わずかに残っていた蓄えを、力づくで奪うよう命じた。そしてラターンを治める族長が抗議すると、ますます怒り狂った。彼は族長を討ち殺すと、部下に町の徹底的な略奪を命じ、住民を皆殺しにさせたのよ。無論、部下たちはこの蛮行に吐き気を覚え、命令に従わない者も多かったが、そうした者たちは皆、立派な反骨心の代償に、町民と肩を並べて殺されてしまった。ラターンの葬送の火は一日中燃え続け、家々の灰は人々のそれと混ざり合った。かくてドローズナはラターンを、未だ大軍勢への供出を渋るほかの町々への、これ以上ない見せしめとしたのじゃよ。

もはやわしにとっては、あやつがまだ生きておること自体が頭痛の種じゃ。あの男の生涯は、ただ己自身の暗い情熱にのみに導かれてきた。これから先も生きている限り、どれだけの悪を為し得ることかと、わしは恐れておる。いまはまだ、この世界に与えた痛みを贖うに足る運命が、奴を待っているよう願うだけじゃ。”